

自分を大切に、そして人も大切に

守安あゆみ

●大阪・認定NPO法人箕面子どもの森学園

市民が創った小中学校

2004年、大阪府箕面市に誕生した「箕面こどもの森学園（旧名「わくわく子ども学校）」は、子どもの生活の中から生まれる興味関心を大切に、子どもの主体性や自立性を育くむ学校が日本にもあったらいいなと願う市民たちがつくった、手作りの小中学校です。設立趣意書には「子どもたち自らの意思で学ぶ新しいタイプの学校」「大人と子ども、先生と生徒、これらの境界線を取り払い、年齢や立場にかわりなく対等な人間として尊重しあう」「個人の自由が尊重され、生徒たちが自分で考え、自分で決定し、行動することが奨励される」と書かれています。まさに、子どもを最大限尊重すると決めた学校なのです。

昨年、「子どもの権利支援センターばれっと」が主催する講座に参加した時に、わたしは初めて子どもの権利条約について学ぶ機会を得ました。その条文一つひとつに込められた「全ての子どもは生まれた時から一人の人間として尊重されるべき尊厳存在である」というメッセージに感動するとともに、これに感動するということはそうでない現実があるからだということを、改めて突きつけられました。これは発展途上国だけの問題ではありません。日本の子どもたちも、その多くは大人に管理され、狭いものさしで評価され、決められたルートを歩かされています。子どもに権利があるということを知られていないのです。

子どもを尊重するという理念は、箕面こどもの森学園の全ての学びのカリキュラムの中しっかりと反映されています。子どもは日々の学習について一人ひとり学習計画を立てて取り組みます。何を学ぶか、どこまで進めるか、どれだけの量取り組むかを、スタッフと相談しながら自分で選び、決めていきます。個人の個性やペースがとても大切にされます。

またそれと同時に、みんなに関わることはみんな決めていきます。子どもの権利条約の理念の中にある「子どもも社会の構成員の一人である」という考え方に通じるものだと思いますが、「こどもの森」では「子どもも『学校』と一緒に創っている仲間の一人である」と考えています。ケンカのトラブルから学校のルールまで、クラスや学校全体など、関わる人全員が集まって、お互いの気持ちや考えを聞き合い、全員が納得するまで時間をかけて話し合います。たった一人反対する人がいても、その人の話を十分に聞き、どうしたらみんなが納得できるかを考えます。話し合いの過程では、お互いの気持ちを受け止められなかったり、考えが合わなかったりすることもあり、なかなか簡単には

いかないことも多いですが、それでも粘り強くあきらめずに話し合うようにしています。それが、一人ひとりを大切にすることだと思っております。

自分を大切に、人を大切に

子どもたちにいつも考えてほしいことは、「自分を大切に、人を大切に」ということです。子ども同士で揉め事があると、よく話を聞いた後、

「それって自分を大切にできてた?」

「それって○○ちゃんのこと大切にできてたのかな?」

と問いかけます。

すると子どもは

「うーん、できてなかった」

「あんまり」

とか言います。

「どうしたらよかったと思う?」

とさらに問いかけると、

「イヤって言えばよかった」

「叩かず言葉で言えばよかった」

とか言います。

日常のちよつとしたトラブルの中で、子どもたちは

お互いを大切にすることを学んでいます。

そんな光景を目の当たりにするたび、気がつくわたくしは自分自身にも「自分を大切にできてる？ 相手を大切にできてる？」と問いかけていたりします。そしてそのたび、自分や相手をもっと大切にしようという心を決めるのです。子どもと共に成長できる場所。わたしにとって、こどもの森はそんな場所でもあります。

みんなで考え支え合うある日の低学年集会

ここで、低学年クラス（1〜3年生20名）の様子をご紹介します。ちよっかいや暴言でみんなから嫌がられている1年生の男の子と、低学年クラスのみんなのお話です。

ある1年生の男の子。よくしゃべり、元気がよくて、人にちよっかいかいをかけては喜んでいました。おかげで周りの人たちは困り顔。彼のちよっかいやチクチク言葉に耐えかねた子たちが、それぞれその男の子と話し合いを重ねてきました。しかし、何度話し合っても彼の行動は変わりませんでした。

2学期も終わりが近づいた頃、周りの人の中にはと

と伝えました。

司会から、

「3学期になってもまだ彼の行動で困っている人はいるる？」

と質問がありました。

驚いたことにクラスのほとんどの人が手をあげました。

これにはその男の子もびっくりした様子でした。一人ひとりがあることで困ったか発言していききました。

「クソババアと言われた」

「おばさんと言われ、ぐいっと押された」

「掃除中に 掃除機の上に乗ってきた」

「ぞうきを投げられた」

「自分の作品の上に乗られて『これ、いらんわ』と言われた」

などなど。

男の子は時折小さな声で、

「えー、そんな知らんぞ」

などとつぶやいていました。自分に対する苦情をこんなにたくさん聞くことになって、さぞかし居心地が悪かったことでしょう。結局、この日はみんなの困りごとを聞くだけで時間が終わってしまいました。

うとう学校に来るのがしんどくなってしまった人も出てきました。そこで、彼とスタッフで話し合うことになりました。そして、どうしたらちよっかいや暴言を止めることができるかその子に考えてもらいました。

その話し合いで、彼は毎日放課後に一日の振り返りをすることを決めて、それに取り組むことになりました。ところが、そうやって毎日、自分の行動を振り返っていても、やっぱり友だちへの迷惑行為は止みませんでした。とうとう、この問題は低学年集会で話し合われることになりました。

スタッフからの提案で緊急の低学年集会が開かれました。

とてもデリケートな問題なので、あらかじめ司会の人とどうやって話し合いを進めるか打ち合わせをしておきました。

最初にスタッフから、

「この話し合いはこの男の子を非難するためではなく、彼を助けるために開きたい。彼の行動は良くないけれど、何か理由があるのかもしれない。彼自身のことはいかどこの森の一人として大切にしてほしい」

終わった直後、3人の子どもがスタッフのところへ駆け寄ってきました。

「あんなあ、○○ちゃん（この男の子の名前）がな、

私がなくした消しゴム見つけて届けてくれてん」

「前、俺が泣いてたとき助けてくれた」

「ぶつかりそうになったとき、○○ちゃんが前に出て

守ってくれた」

あれだけたくさん困りごとを出した後だっただけに、きつと、○○ちゃんはいいいところもあるんだよと言いたい気持ちが出てきたのでしよう。この子たちの言葉聞いて、わたしはとても嬉しくなりました。

翌日も話し合いの続きをしました。始めに、昨日の終わりに聞いた3人の話をみんなに伝えてもらいました。自分のいいところをみんなの前で言ってもらえたからか、男の子は恥ずかしそうにいました。

そして、次は彼の気持ちを聞こうということになりました。ところが、彼はうまく自分の気持ちを言うことができませんでした。

そこで、スタッフは

「昨日の振り返りで、○○ちゃんは『みんなが言っ

たこと、全部は覚えてないけど、みんなが言うならきつと俺、全部やったんやと思う』って言ってたよ』と伝えました。

すると、彼の行動が嫌で学校に行きにくくなってしまった女の子がいました。

「○○ちゃんも辛いんじゃないかなあ。みんなに嫌なこと言うから、みんなが離れていつてしまつて寂しいんじゃないかなあ」

別の子も言いました。

「我慢すぎて自分をコントロールできなくなつてるのかな?」

「ストレス?」

「遊んでほしいから、ああいうことをするのかもしれない」

男の子は黙って聞いていました。この日は彼の気持ちに寄り添おうとする人たちの温かい声で終わりました。

緊急低学年集会在2回終わった後、この男の子に変化が現れました。3年生の女の子が嬉しそうに報告に来たのです。

「あんな、○○ちゃん、いつもやったら』どけ、クソ

「ほめる」

「なぐさめる」

「面白いことをする」

など、この男の子に寄り添った対応をしようというものがたくさん出てきました。「こどもの森」で一番大切にしていること、それは「自分も、人も大切にすること」です。子どもたちはまさにその二つを考えてくれたのでした。

みんなが自分のことを考えてくれている間、男の子は②の自分ができることを考えました。そして、これまで思いついて取り組んできたことの他に「みんなが自分にしてほしいと思うことをする」をやってみることにしました。

でも、「みんなは一体何をしてほしいんやろう?」それがわからなかったのも、彼は帰りのミーティングでみんなに聞いてみることにしました。子どもたちからは、

「ごめんなさいと言う」

「落としたものを拾ってほしい」

「やってみてできるとわかったことは、続けてやってほしい」

「○○ちゃんは面白いことをするから、そうやってみ

ババア』って言うのに、今さつき』どいてください』って言うてくれてん!」

そして、3回目の低学年集会では、彼の行動を変えるためにどうしたらいいかが話し合われました。

- ① クラスのみんなができること
- ② 彼本人ができること
- ③ スタッフができること

この中から①について2、3人のグループで意見を出し合い、全体でシェアする形で話し合いました。

「その場でやめると言う」

「目を合わせない」

「反応しない」

といった、困った行動に対してNOと伝えるといったものが出た一方で、

「なんでやるか聞く」

「気持ちを考えてあげる」

「仲間はずれにしない」

「いいところを言う」

「ものを貸してあげる」

んなを楽しませてほしい」

といった意見が出ました。実際、彼は朝のハッピータイムで、自分が体験した面白いエピソードを詳しく話してみんなを楽しませてくれたりしていました。

こうして結局、3日間かけてこの問題について話し合いました。

あれから2年。男の子は3年生になりました。今でもとてもエネルギーシユな彼ですが、年下の人の面倒を見たり、クラスの年長者として話し合いの司会を進んで引き受けたりと、よい面が育ってきたように思います。目の前にいる子どもたちを信じることに、長い目で見守ることの大切さを感じています。

